

外交と禪僧

東アジア通交圏における禪僧の役割

伊藤幸司

はじめに——「外交と禪僧」の歴史的前提——

中世日本の外交は禪宗の僧侶によつて担はれていた。当該期、日本列島をめぐる東アジアの海域世界では人・モノ・情報の往来が活発に展開し、その交流を担う主要な存在が倭寇や海商といった海上勢力であり、禪僧であった「村井草介 1988・第二章」。なぜ、宗教者たる禪僧が貿易活動や国家的な外交活動に関わったのかという点については、平安末期以降、日宋間の活発な貿易活動とともに日本列島へ移入された禪宗のあり方が大きく影響している。

禪宗は、一二世紀後半以降、博多津唐房に住着し、日宋貿易を担つた宋商人・博多綱首によつて、日本列島へ本格的に移植された。当時は、江南禪宗界が経済的・宗教的市場として日本に注目し、日本側も最新の大陸仏教への憧れから、途絶えていた入宋僧が再び増加するという時代であった。そのようななか、博多綱首は故国南宋で繁栄していた禪宗に交易の保障を求め、檀越として禪宗寺院を建立することで、その信仰生活を博多に移入し異国的世界を創出した「伊藤幸司

2010】。この結果、中世日本最大の国際貿易都市博多では「博多禪」が繁栄する「川添昭二 1999・第三章」。鎌倉初期の本格的な禪寺聖福寺を創建した。聖福寺の山門には、そのことを誇るかのように「扶桑最初禪窟」の扁額が掲げられてゐる「川添昭二 1988」。鎌倉中期には、聖福寺の隣地に、博多綱首謝国明が入宋僧円爾を開山として承天寺を創建した「川添昭二 1987」。これ以前、円爾は大宰府の地にも入宋僧隨乘坊湛慧の建立した崇福寺を開堂していた。聖福寺や承天寺は「綱首の寺」として宋商人の交易活動と一体化し、大陸文物の移入に重要な役割を果たした。博多の禪寺は、創建以来、博多における貿易拠点であり、商船に便乗して渡海を果たす多くの入宋・入元僧や大陸僧の交流の場として存在してゐた「川添昭二 1993・1999・第三章」。ゆえに、禪僧と貿易商人は禪寺を紐帶として出会い、寺内に海域交流の知識が蓄積されたことで、禪寺は大陸事情に精通した人的資源をも供給する場へと発展した。

日本の禪宗は、博多からさらに海陸交通の結節点であった

港町や政治都市京都・鎌倉へ展開することで徐々に列島社会へ定着していくが、それぞれの禅寺や禅僧は孤立していた訳ではなく、相互に様々な禅宗ネットワークで結ばれていた〔伊藤幸司 2006a〕。このネットワークは、博多からさらに海を越えて、禅宗の淵源ともいえる江南禅宗界のみならず、朝鮮半島の高麗禅林とも結び付き、一五世紀には琉球列島まで展開した。禅宗界はまさに東アジア全体を国境を跨いで形成されていたのである〔伊藤幸司 2010〕。

このような禅宗の国際的特性が、一三世紀以降の日本外交に禅僧が携わっていく歴史的前提となつたのである。

一 蒙古襲来と禅宗勢力

一三世紀、ユーラシア大陸を席巻したモンゴルの登場は、日本と大陸の間にも緊張関係をもたらした。一二六七年、フーリヤーの国書を携えて来日した高麗国の藩皇を皮切りに、モンゴル側は日本と好を通じることを求めて、九世紀末期の遣唐使廃止以降、大陸に向けて正式な国交を結んでいなかつた日本は、一貫してモンゴルの国書に返書をしないという方針を執つた。この政策のイニシアティブを握つたのは、古代以来外交権を有していた朝廷ではなく鎌倉幕府（得宗政権）であつた。この外交判断は、日本列島を取り巻く国際状況を全く把握せずに行われていた訳ではない。

平安末期以降、宋代仏教を希求する多くの日本僧が大陸へ渡航していたが、鎌倉中期の建長年間以降になると江南禅宗界の禅僧の来日（渡来僧）も急増し、一三世紀半ばからの約

一〇〇年間は「渡来僧の世紀」ともいえる時代となつた〔村井草介 1995・第二章〕。この背景には、北条得宗家が多くの渡来僧を大陸から招聘し、独占的に確保することで禅宗受容を熱望する諸氏に対しても得宗政権の権威を維持しようとする思惑があつた〔齊藤夏来 2003・第二章〕。そして、多くの渡来僧や帰国した入宋・入元僧の受け皿として北条得宗家が都市鎌倉に建立したのが建長寺や円覚寺であつた。建長寺は、一二四九年、北条時頼の発願によつて創建され、南宋から来日していた蘭溪道隆を開山とした禅寺であり、円覚寺は北条時宗が建長寺第五世であつた無学祖元を開山に招聘して創建した禅寺である。両寺に招聘された渡来僧には、大陸でも相応の名声を馳せた高僧も多く、両寺の開創を契機として鎌倉には禅宗が定着し、大陸文化の受用口としての役割を果たす異国的空间が形成された〔川添昭二 1999・第三章〕。江南禅宗界と直結する鎌倉の禅寺は、多くの渡来僧や帰国した入宋・入元僧によつて最新の大陸情報が恒常的にもたらされたことから、鎌倉における国際情報センターの様相を呈していした。その結果、得宗政権は大陸情報の供給源として、建長寺や円覚寺など麾下の禅寺に集住する禅僧たちを位置付けることができた。いわば、鎌倉禅林の禅寺・禅僧たちは得宗政権の外交能力を補完する存在であつた。

特に、モンゴルの脅威に直面した北条時宗は、大陸の著名な高僧を積極的に招請して鎌倉禅林の住持に就けるよう努めているが、これは彼のモンゴル対策の一環といえる。渡来僧のなかには、例えば、建長寺第一世となつた兀庵普寧の

ようには江南へ帰国してしまった者もいたが、彼はその後も日本にいる円爾や東巖慧安、六波羅南殿（北条時輔、時宗の義兄）らへ書簡を通じて大陸の動静を頻繁に伝えていた（1）。また、時宗が江南禪宗界に求めた石帆惟行の法語を携えて一七一年に来日した西澗子暉も、最新の江南事情を伝えた後、新たな高僧の招聘を思い立った時宗からその根回しを依頼されて帰国している〔葉賀磨哉 1953・第二章第二節〕。この成果として無学祖元が時宗の招聘に応じて来日することになるが、この間、西澗子暉も兀庵普寧と同様、書簡を通じて大陸の動静を伝えていた（2）。そして、一二九九年には日本招諭のために派遣された蒙古国信使一山寧に同行して西澗子暉は再来日している。このように、モンゴル襲来前後の日本禪林では、日本僧のみならず渡来僧でさえも東シナ海を往復する程、活発な交流があった。この結果、北条時宗は、禪僧によって鎌倉にもたらされた大陸情報を獲得することで、襲来前から既にモンゴルに対する一定程度の知識を共有することができたのである。

ただし、その大陸情報は江南禪宗界を有する南宋の立場から語られるものであった。例えば、時宗の精神生活にも深く関わった無学祖元は、来日前にモンゴル兵から刃を突きつけられ、「臨劍の頌」を悠然と唱えることで難を免れるという経験をしており、彼の伝える大陸情報とは即ち故国南宋（江南禪宗界）を侵略しようとする征服民族モンゴルの姿であつた（実際、南宋は一二七九年にモンゴルによって滅亡）〔川添昭二 1958・第三章〕。無学祖元に代表される南宋寄りの大

陸情報が、その後の得宗政権の外交指針に少なからず影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない。

一方、得宗政権と連繋し、鎮西奉行として九州大宰府という最前線でモンゴル対策を講じていた武藤少弐氏もまた、博多や大宰府で活動する渡来僧や入宋帰国者、あるいは貿易商人（博多繩首）などを通じて大陸情報を収集していたと思われる。特に、博多の聖福寺や承天寺、大宰府の崇福寺は、渡海求法する入宋僧や渡来僧が来日した直後に必ず開かれる場であり、これらの諸寺が情報の主要な供給地であったことは想像に難くない。ここから発信された大陸情報の一部は、恐らく禪宗界のネットワークや少弐氏を介する幕府の伝達ルートによって鎌倉へもたらされたと思われる。

しかし、数度のモンゴルの国書到来によって高まる危機感に對し、得宗政権と大宰府の少弐氏はモンゴル対策の上で、最新の大陸情報により精通し、かつ得宗政権とも密接な禪僧を必要とした。ここで登場するのが南浦紹明という禪僧である。彼は駿河国安倍郡の出身で、郷里の建穂寺の淨弁について学んだ後、鎌倉建長寺の蘭渓道隆のもとで禪僧となつた。一二五九年入宋して虚堂智愚の会下に入り、彼の淨慈寺や徑山移住にも隨從した。虚堂智愚は南浦紹明の能力を見抜き、自らの禪風が彼によって日本で盛大になることを予言するほどであった〔送日本南浦知客〕『虚堂和尚語錄』卷一〇）。一二六八年頃に帰国した彼は、再び建長寺の蘭渓道隆に参じるが、一二七〇年、得宗政権の意向によって筑前へ下向し、姪浜の興徳寺に住すことになる。興徳寺は、北条時

宗の叔父にあたる時定によつて創建された禅寺で、南浦紹明が開山となつてゐる。彼の筑前下向は、得宗政権によるモンゴル対策の一環として捉えることが可能である。即ち、南浦紹明は北条得宗家と密接な建長寺に長く滞在した北条一族寄りの禅僧であり、かつ日元関係が次第に緊迫していく最中に、最新の大陸情報を有して帰国した人物であつた。得宗政権とすれば、まさに対モンゴル外交の顧問的役割をあてがう人物として最適任であり、大宰府守護所（少弐氏）の外交経験不足を補完する者として期待することが可能であつた。それを裏付けるように、南浦紹明はモンゴルの使者として一二七一年に来日した趙良弼（さちやうひつ）と会見し、詩文の交歎を行つてゐる（『大応錄』卷下「和蒙古国信使趙良弼観」）[川添昭一 1999・第三章]。そして、興徳寺に入寺して三年目の一二七二年、彼は少弐氏が外護する大宰府横岳の崇福寺に入つたが、これは同寺のぼうが少弐氏を補佐する上で都合がよかつたからであろう。当時、崇福寺と少弐氏は一体の関係にあつた。南浦紹明は、少弐資能との関係も密接であつたようであつて、資能の死に際して、非常に丁重な詩文を残してゐる（『大応錄』卷下「太宰府都督少卿禪門秉火」）[川添昭一 1987]。当該期以降、得宗政権は南浦紹明のようて大陸情報を精通し、かつ政権と密接な禅僧（例えは藏山順空や寒巖義尹）を、九州地域の交通の要衝にある禅寺へ配置してゐる。この傾向は、特に博多で顯著であり、聖福寺には渡来僧である蘭渓道隆や大休正念らの弟子筋が次々と入寺し、承天寺へは入元僧を弟子に多く有する南山土雲が入寺した。まさに、鎌倉

末期の博多の禅寺は鎌倉と直結する存在であり、「上田純一 2000・第二章第一節」[伊藤幸司 2006a]、承天寺の南山土雲は鎮西探題の対外交渉上の頭脳と位置付けられていた[川添昭一 1993]。さらに北条一門は、博多から航路で繋がる港町の禅寺の開基櫻越となつてゐる。得宗政権は、海陸交通の結節点である港町の禅寺を確保することで、港町を結ぶ禅宗ネットワークを押さえ、人・モノ・情報の掌握という点でモンゴル襲来への対応策としたのである[伊藤幸司 2006a]。この頃、得宗政権は北条一門と密接な教尊や忍性に代表される西大寺系僧も利用して交通拠点の掌握に励んでいた[河合正治 1968]、[網野善彦 1974]。律宗は、禅宗と同じく宋代に成立し元代にも繼承された「禪教律」十宗觀という大陸の仏教觀を共有する存在（＝禪律仏教）であり、「大塚紀弘 2003」、得宗政権は顯密仏教勢力とは異なる新たな仏教勢力をも活用することで、未曾有の対外的危機に対処しようとしたのである。

いずれにせよ、日本禅林の禅僧が外交という極めて政治的な行為に携わつていくことになつたのは、モンゴル襲来という外的要因が契機となつたことは間違ひない。一度の襲来後、モンゴルは一二八四年に補陀山の宝陀寺住持惠済如智を副使として国信使を派遣し（前年にも来日を試みるが暴風雨で漂流し失敗）、一二九九年にも同じく宝陀寺の一山一寧に妙慈弘濟大師（めいし こうぜい だいし）という号と江南諸路耕教統（旧南宋治下の江南における仏教界を統括する長官）の肩書きを与えて、国信使正使として派遣した[西尾賢峰 1999・第一章]。舟山列島

の補陀山（普陀山）は、博多—慶元（寧波）を結ぶ大洋路上の要衝で、海難を救う觀音靈場として内外の信仰を集めているよう、宝陀寺も日本の慧尊^{えんそん}が開山として伝承されているように、日本との因縁が深く、日本でも広く知られる所であった。從来、モンゴルは官人を國信使として派遣していたが、当該期に至って、仏教國である日本を招諭するために、日本とゆかりのある宝陀寺の禪僧を使僧として起用するという方針に転向したことが分かる。この背景には、得宗政權が渡来僧や入宋・入元帰國僧らを外交顧問的位置付けとして起用していたことと少なからず関係があるものと推測される。この場合、モンゴルは日本の文化のみならず、交流実態に合わせる形で國信使を派遣したことになる。

二 高麗・朝鮮・明と中世日本

1 日麗通交と日麗禪林

一二三三三年、日本では得宗政權が滅亡し、建武政權が誕生するものの、その数年後には足利尊氏によって室町政權が成立した。室町政權による列島外への眼差しとしては、一二四二年に日元貿易が復活した際、足利直義が天龍寺造営のために天龍寺船（天龍寺造営料唐船）を元へ派遣したことになります。この派遣に際しては、室町政權による新たな渡來僧の招聘活動という側面もあつたが、「榎本涉 2006」、いざれにしても國家外交という範疇ではなかつた。室町政權最初の外交経験は一四世紀半ば過ぎの高麗からの接触に始まる。

一三六七年、活発化する倭寇の撃退を求めて、元の征東行

中書省の使者金龍と高麗の使者金逸が日本に派遣された。この外交使節に實際に対応したのが室町政權であり、足利義詮は春屋妙葩^{かわらめうぱ}に僧錄の肩書きを与えて返書させ、翌年に天龍寺の梵鑪^{ぼんらく}と梵鑪^{ぼんらく}を派遣した（中村栄孝 1995・第六章）。春屋妙葩は、夢窓疎石の弟子であり、俗縁でも甥にあたる人物である。夢窓疎石は、五山派が禪宗界最大の勢力にのし上がり、幕府・朝廷と極めて親密な関係を取り結ぶに至った最大の功労者であり、仏光派から独立して夢窓派という門派勢力を確立した人物であった。春屋妙葩は夢窓の後継者として夢窓派を統率し、五山を制度として完成させ、それに幕府外交の実務機関「外交機関としての五山」としての性格をも附与することに尽力した（玉村竹一 1981／1983）【村井章介 1983・第七章】。彼は、この一件を契機として、その後の室町政權の外交活動に深く関与していく。

ところで、この時の高麗と室町政權の外交交渉には入念なバックアップがあつた。実は、春屋妙葩とその会下の禪僧たちが、一連の外交折衝の裏で交渉がスムーズに進むよう暗躍していたのである。春屋妙葩は、高麗使の来日を幕府の仁徳が及んだ成果だと喧伝し、伝統的に朝鮮蔑視觀を抱く政權首脳陣との溝を埋める苦心をした。彼の下には從書記という「高麗生縁」（高麗生まれ）の者がおり、高麗使側にも禅雲寺長老延銅^{えんどう}といふ禪僧が隨行していた。延銅は太古愚愚^{ヲゴヤウ}と曰知の仲であり、太古の下には日本僧も參禪していた。太古は、金下の日本僧から最新の日本事情を収集していた可能性があ

る（藤田明良 2008）。この後、從書記は天龍寺の梵鑪^{ぼんらく}と梵鑪^{ぼんらく}

に随行することで高麗へ帰国するが、これも春屋妙葩の対高麗外交対策の一環であったと推測される。

ここに見るような従書記のあり方は、その後も継承されている。一三七五年、高麗は再度の倭寇禁圧を求めて羅興儒を派遣するが、彼は間諜と間違えられて捕らわれてしまう。その彼を救つたのは、若い頃に日本僧に従つて来日していた高麗吉州出身の良柔という禪僧であった（『高麗史』卷一「四・列伝・羅興儒伝」辛禴二年一〇月条）。その

後、良柔は徳叟周佐の返書を携え、室町政権の使者として羅興儒とともに高麗へ渡海している（『高麗史』辛禴二年一〇月条）。良柔の同行者には、高麗に渡海経験のある中庵寿允もあり、彼はこの渡海時に太古普愚から道号偈を得たものと考えられる〔藤田明良 2008〕。このように、当該期における日麗通交の復活と展開は、それまで行われていた日麗禪林の交流を前提とした日本側と高麗側の禪僧による表裏の協力で実現したのである。

倭寇問題を契機に始まった日麗通交は、その後、室町政権のみならず、倭寇禁圧に実効力のあった九州探題今川了俊や大内義弘との間でも進展した。そして、これらの通交を担つたのは高麗側が官人であるのに対し、日本側は禪僧であつた。一三六八年には、日本使慶菊侍者が渡海しているが、彼には対馬島主崇宗慶も土物を託していた（『高麗史』卷四・恭愍王一七年七月乙亥条・一月丙午条）。一三七七年には九州探題今川了俊が僧信弘を派遣し、倭寇禁圧には困難を伴うがその用意がある旨を高麗側に伝えた。高麗側は了俊の意

を称賛し、鄭夢周を派遣することで了俊への報聘とした〔岡本真 2007〕。これを受けて、翌年、了俊は信弘とともに倭寇討伐のための軍六九人を率いて渡海させ、一定程度の戦果を挙げた。以後、高麗は倭寇禁圧要請を室町政権ではなく、九州の実力者に対して頻繁に行うようになった〔川添昭一 1996・第五章〕。ここにみる使僧信弘は、僧侶でありながら倭寇との戦闘を行つており、その多面的な能力を窺うことができる。一三九二年、李成桂が高麗国王からの禅譲という形で新たな国家朝鮮王朝を誕生させた。しかし、朝鮮半島と日本列島との通交関係は高麗末以来の交流形態がそのまま維持された。例えば、李成桂が初めて室町政権に派遣した使僧覺錦に對して、室町政権は絶海中津に返書をさせ中庵寿允を渡海させている〔田中健夫 1975・第三章〕。中庵は、以前にも幕府の使節として高麗へ赴いたことのある人物である。また、一四世紀末期の日朝通交の場で活躍する禪僧に梵明なる者がいる。彼は朝鮮僧で、日本回礼使金巨原とともに被虜人の送還に從事したり、九州探題今川了俊の使者に度々同行し、朝鮮に猿を献上することもあった〔『太祖實錄』三年五月丙寅条・七月庚戌条・六年一〇月乙卯朔条〕。日本と朝鮮は、このようないくつかの両国を縦横に往来する禪僧をはじめとする媒介者によつて交流することができた。一三九九年、室町政権（足利義満）が、大内義弘を仲介として朝鮮との間に正式な外交関係を成立させることができたのも、その交流を実際に支える高麗末以来の両国仏教界の交流があつたからなのは言うまでもない〔橋本雄 1998b〕。

朝鮮は、倭寇対策として倭寇を平和な通交者へと変質させたために、多様な日本側通交者を受け入れた。このため、多くの倭人とともに、玄界灘地域の社寺も独自に朝鮮通交を行った。このなかには、壱岐安國寺、博多承天寺や慈雲庵（曹洞宗）[上田純一 2000・第二章第四節]の禅僧もおり、大藏經求請や被虜人送還といった独自の通交を展開した。[伊藤幸司 2010]。これらは、世宗期以降の通交統制によって途絶えるものの、その後は地域権力の外交を担う存在へとシフトしていく。

2 初期日明通交と日明禅林

一三六八年、元末の動亂を制した朱元璋が即位し「大明」を建国した。海禁・朝貢システムを導入していく明朝の成立は、東アジア海域世界に大きな秩序変動をもたらした。即ち、明との通交は明から冊封された各国の国王が派遣する遣明使（官船）に限定され、民間貿易船（民船）が締め出されることになったのである。

明と日本との接触は、洪武帝の「四夷君長」への遣使入貢の呼びかけに始まる。当初、明側は日本へ派遣する明使に楊載・趙秩（一三七〇年）のような官人を起用していたが、一三七一年に征西將軍懷良親王が「良懷」名義で僧祖来と僧九人を派遣して入貢すると、[太祖實錄] 洪武四年一〇月癸巳と無逸克勤（南京瓦官寺／天台僧）という禅僧十天台僧の組み合わせの使節を派遣した。これに先立ち、洪武帝は元末に

入元し、そのまま明代の江南地域に滞在していた日本僧椿庭海寿を招請し、日本の国内情勢について詰細な質問をしていた。洪武帝は、以後も「無我省吾」を絶海中津など大陸に留学していた日本僧をしばしば召見して情報収集を行っていた。そして、椿庭海寿と、同じく入明していた「權中中興」を、日本へ渡海する冊封使仲猷祖闡と無逸克勤の通事として随行させた。[葉貫磨哉 1993・第四章第三節] [上田純一 2006]。洪武帝が、大陸にいる日本僧を通じて日本情報を獲得し、対日外交に利用していたことは明らかといえる。

明側が冊封使として禅僧と天台僧を選択した背景には、明における禅宗重視策がある。明朝では、元朝以来 仏教諸宗派のなかで最も優勢であった禅宗の僧侶が、中国仏教界全体を統制する善世院（後の僧錄司）の職掌において中心的役割を担っていた（ただし、一部の職掌は天台僧も担当していた）。特に、元末に蒲室疏法四六駢臘文を完成し、『蒲室集』を著した笑隱大訏を輩出した大覺派の禅僧がその中枢を占めた。明初に善世院が設置されたのが、笑隱大訏が開山した龍翔寺の寺名を改めた「大天界寺」であったことは象徴的ともいえる。明代の禅僧は、皇帝に寄着した極めて政治的な存在であったため、大慧派の禅僧たちは明初の仏教界のみならず中央政界においても強大な権力を形成した。しかも、建国当初、大慧派禅僧の多くが洪武帝の使者として近隣諸国へ頻繁に派遣されていた。禅僧が派遣された国には、日本以外にも吐蕃・省合刺國・西域などがあり、尼巴族にはラマ僧が派遣されていた。明は正式な通交関係（朝貢関係）が成立してい

ない国で、仏教が盛んな地域へは、仏僧を使使者として派遣していたのである。僧侶の派遣は、相手国に対する一種の懷柔であり、僧侶を通じて朝貢関係の形成や促進を達成しようとしたのである〔上田純一 2006〕。日本に仲猷祖闡（禪僧／大慧派）と無逸克勤（天台僧）が派遣されたのも、明が日本の実情を勘案した結果といえよう。時代はやや降るが、一四〇二年、足利義満を冊封するために来日した冊封使天倫道舞（揚州天寧寺／禪僧／大慧派）と「庵一如（天台僧）」に関する、「唐土カラ日本ニハ禪宗ト天台宗ト力盛ナトテ、禪ニハ天倫（台宗ニハ）庵ヲコチヘ渡サレタソ」（『勅修百丈清規雲桃抄』（建仁寺西足院本）巻上）〔海老根聰郎 1973〕との記載があるが、この認識は仲猷祖闡と無逸克勤の派遣に当たつても同様であつたと思われる。

このような明の外交方針に敏感に反応したのが足利義満であり、既に高麗との通交関係を主導していた春屋妙葩である。当初、懷良親王を冊封するため来日した仲猷祖闡らであるが、懷良の没落に伴い、最終的に交渉相手を足利義満へと変更している。当該期、明との通交を望んでいた義満は、春屋妙葩やその周辺の入明帰國僧から最新の大陸情報を入手していた。例えば、當時管領細川頼之と対立し丹波雲門寺に退隠していた春屋妙葩は、一三七〇年懷良親王に入貢を勧めた明使揚載の一行で帰國することなく博多や山口に居残つた趙秩や朱本、そして一三七二年に来日した仲猷祖闡や無逸克勤と頻繁に詩文や書簡のやりとりをしていたことが『雲門一曲』から分かっている〔村井章介 1988・第六章〕。義堂周

信も入明僧等がもたらす大陸情報を収集していたことが、その日記『空華日用工夫略集』から窺い知ることができる〔西尾賢隆 1999・第七章〕。同時期、明の洪武帝が大陸にいた入明僧から日本情報入手していたように、日本の足利義満も彼らを通じて大陸情報を獲得していた訳である。日明両国の情報媒介者としての禪僧の姿が浮かび上がつてくる〔上田純一 2006〕。

こうしたなか、一三七四年足利義満は仲猷祖闡らの帰国に合わせて、室町政権最初の遣明使として聞済田宣・子建淨業・喜春らの禪僧を派遣した。ただし、この時に限らず義満の遣使はことごとく洪武帝から入貢を拒否され、彼の念願が成就するのは洪武帝死後に即位する建文帝の治世まで待たねばならなかつた〔小葉田淳 1941・第一章〕〔田中健夫 1975・第一章〕〔佐久間重男 1992・第一部第一章〕〔橋本雄 1998b〕。そして一四〇一年、祖同（同朋衆）・肥富（筑紫商客）らを使節とする義満の遣明使が建文帝に受け入れられた。この背景には、叔父の燕王朱棣を奉制するための意味合いがあつたことが指摘されている〔村井章介 1999〕。おそらく、義満は建文帝をめぐる大陸情報を把握した上で、ここに入貢の好機と捉えて遣使をしたのであろう。この時、遣明使の正使・副使は禪僧でなかつたが、絶海中津に從学した仲方中正（夢密派）が随行し、具体的な外交実務を取り仕切つていたと考えられている〔高橋公明 1985〕。建文帝は翌年、早速、義満を日本国王に冊封する冊封使として天倫道舞・庵一如らを派遣した。

冊封使が来日すると、義満は冊封使から日本国王に封じられた南京天界寺で、明の規定する外交儀礼を習得していた可能性が高い入明帰国僧たちである。ただし、彼らは明側の礼式に準拠して、義満に卑屈な態度を強要するような受封儀礼を執り行つたのではなく、実際には仏教色を強調し、義満が明国書に遜る姿勢を意図的に排除することで、結果的に義満が尊大な態度で受封されるよう変容させていた[橋本雄2008]。そして、義満はこの冊封使の帰国に合わせて一四〇三年に回礼の遣明使を派遣するが、その国書（遣明表）は入明中に季潭宗泐（笑隱大師の弟子）から蒲室疏法を学んだ絶海中津が起草し、構成員は正使堅中圭密（天龍寺／禪僧／夢窓派）以下、祥庵梵雲（禪僧／夢窓派）や明空志玉（廬山寺／天台僧）らが伴うものであった。このメンバーが、禪僧＋天台僧で構成された明の冊封使を意識した結果であることは言うまでもない[伊藤幸司2009]。さらに、当該期、春屋妙葩・絶海中津やその周辺の夢窓派禪僧が、明の大慧派禪僧である春屋・絶海系の夢窓派が、明で絶大な存在感を示す大慧派と可視化したコネクションを確立することで日明通交を積極的に展開している[村井章介1988・第七章]「上田純一 2006」[伊藤幸司2009]。この一連の行為は、幕府外交を語録の序文・跋文や塔銘の起草を依頼し、頂相への著賛要請を積極的に展開している[村井章介1988・第七章]「上田純一 2006」[伊藤幸司2009]。この一連の行為は、幕府外交を支える春屋・絶海系の夢窓派が、明で絶大な存在感を示す大慧派と可視化したコネクションを確立することで日明通交をうとしたからである[伊藤幸司2009]。

一四〇三年の回札の遣明使は、靖難の変を経て実権を握った永楽帝からも日本国王の正式な通文（朝貢）として認知され、一四〇四年に永楽勅合・大統暦・「日本国王之印」金印などの下賜を受け、明使趙居任を伴つて帰国した。以後、日明関係は日明勘合による渡航制度が確立し、遣明船の派遣活動は安定的に展開されていく。同時に、明は朝貢関係が安定化した国に対しては、相手国の情況を考慮することなく、官人を使節として派遣した。一四〇四年の明使が趙居任といふ官人であつたように、以後、日本へ派遣される明使は一貫して官人となり、僧侶の姿はなくなる。一方、室町政権側も日本明通交が安定化したことで明の手法に固執することなく、外交活動を実績のある禅僧に任せ、外交僧としての天台僧の姿は消えていった〔伊藤幸司2009〕。

3 「外交機関としての五山」の成立・変容・解体

モンゴル襲来を契機として外交に携わることとなつた禪僧は、得宗政権のもとで制度上その地位を明確に位置付けられていた訳ではなかつた。しかし、一四世紀後半、高麗が倭寇禁圏問題を契機に外交使節派遣という形で日本へ接触し、大陸で海禁・朝貢システムという新秩序の構築を目指む明が成立すると、新たに誕生した室町政権は国家外交への関与を余儀なくされた。特に、海禁・朝貢システムは、明の認める国王にのみ遣明船派遣を許可するものであつたから、事实上、莫大な利益を生み出す対明交易の貿易利権とも運動していだ。ゆえに、室町政権（足利義満）も日本列島にいる競合他

者を排除し、明の認める日本国王として、日明通交という國家外交の樹立とその安定化に努めざるを得なかつた。その際、日麗通交や日明通交といふ國家外交を表裏の舞台で支えたのが、東アジアを跨ぐネットワークを張り巡らし、各國の政権中枢にも参入していた禅宗勢力であつた「伊藤幸司 2010」。禅宗界は、日麗禅林・日中禅林相互で頻繁な人的情往来があり、それに伴い各國の情報も禅林内に流入していったため、禅僧は新たな國家外交といふ交流を担う存在として注目された。室町政権が、高麗との外交で春屋妙葩を活用したのは、それまでの日麗禅林のあり方を鑑みれば必然であつた。

その後、日明通交の問題に直面した際も、明における禅宗重視策とその外交手法を考慮すれば、明皇帝に近侍し、善世院をも掌握する大慧派禅僧とのコネクションがある春屋妙葩・絶海中津系統の夢窓派勢力を、足利義満が積極的に起用したのも当然といえる。

また、民間交流とは一線を画す國家外交では、外交文書の起草や外交儀礼の遂行、外交折衝における漢詩文の交歓などの文化交流「村井章介 1995・第一／四章」に適応できる知識や技術が不可欠となる。日本の禅僧は、中国の士大夫的教養を有していたことから、四六駢麗文を用いる遣明表や古典的比喩を駆使する漢詩文を作成する能力があり「西尾賢隆 1999・第八／一〇章」、大陸留学を通じて受封儀礼の知識を獲得し「橋本雄 2003」、一部は大陸の言語にも精通していたため「榎本涉 2003」、外交を担う集団としては理想的であつた。もちろん、いのうな知識の一部は公家社会や顯密勢力

でも共有されていたものの、朝鮮蔑視觀のような伝統的对外觀や神國思想を強く抱く彼らが室町政権の外交官として勤務し、異國に赴くことは有り得なかつた。その意味でも、大陸的要素が極めて強く、中國禪宗界との接点を重要視し憧れる禅僧の姿は外交官として適していた。この結果、初期室町政権の外交を担つたのが春屋妙葩とそのエコール（法統・学統集団）であり「村井章介 1988・第七章」、そのエコールの一員で春屋妙葩の後継者ともいえる絶海中津とそのエコールであつた「橋本雄 2007」。いにいわゆる「外交機関としての五山」が誕生する。

室町政権の「外交機関としての五山」というあり方は、夢窓派を中心とする京都五山系の禅宗勢力にとつても非常に有意義であつた。明への渡航手段が渡明船に限定された結果、事実上、日本僧として入明が可能であつたのは外交僧たる禅僧のみといふことになり（初期段階は一部に天台僧も参加）、日元通交の段階までは入元していた律僧などの他宗派勢力は大陸との関係がシャットアウトされた。朝鮮通交の場では、室町政権の派遣する日本国王使の本質が朝鮮への大藏經求請にあり、遣朝鮮國書の起草僧の選任やその作成を当初は應元僧録、後に蔭涼職^{いんりょうしょく}が職掌とした結果「橋本雄 1997」、京都五山系勢力が日本国内で需要の高かつた高麗版大藏經を獲得しやすい立場となつた「橋本雄 1998」。京都五山系の禅宗勢力からすれば、室町政権の外交を担つことは顯密勢力に对抗し得る極めて有力な手段であつたといえる。

室町政権による初期外交は、国境を越える前代からの禅僧

の交流を基礎とした外交活動である側面が強かつた。しかし、日明関係が安定化し入明の手段が日本国王名義の遣明船に限定される一方、日朝関係でも日本列島からの多様な渡航者の受入を峻別する世宗期以降の通交統制策が実施されると、国境を越える禅僧の往来も外交使節が主体となり、禅林相互の交流も極めて限定的なものとなつた。同時に、室町政権の下で五山官寺制度が整備され、五山系臨済禪を管轄する鹿苑僧録（相国寺鹿苑院主）や、僧録と將軍の媒介者としての蔭涼職（鹿苑院蔭涼軒主）が組織として確立した「今枝愛眞1970」。ここに至つて、一五世紀以降の新たな外交秩序の下、鹿苑僧録や蔭涼職の職掌の一部として外交事務が明確に位置付けられ、「田中博美 1987」、「橋本雄 1997」、五山で徐々に蓄積された先例に基づいて外交が運営されるようになつたことで、室町政権の「外交機関」としての五山」が完成し、外交を担う禅僧のあり方も明確化したのである。一五世紀半ば頃、鹿苑僧録を勤め、第一二次応仁度の遣明使の携帶する遺明表も起草した瑞溪周鳳が、「近者大將軍は國を利せんが為の故に、竊かに書信を通す。大抵は僧を以て使と為し、其の書もまた僧中より出るのみ」（『善勝國宝記』卷中・四号文書「田中健夫 1995」と記し）、朝鮮で『海東諸國紀』を著した申叔舟が「竊かに海東諸國を觀るに、凡そ信札においては必ず経流に命ず」（『保闕齋集』卷九）と称したことは、当該期日本の外交における禅僧の立場を最も端的に表している。ところで、「外交機関としての五山」は京都相国寺を拠点とする夢窓派勢力がその中枢的活動を展開していたが、五山

자체は禪宗界の派閥ともいえる多様な門派によって構成されており決して一枚岩ではなかつた。五山のなかには、夢窓派に比肩し得る勢力として東福寺を本拠とする聖一派（派祖は円爾）や、五山の枊外（山隣派あるいは林下）へも勢力を伸張させていた大應派（派祖は南浦紹明）以外にも、大覺派・大鑑派・一山派・幻住派などの諸勢力が混在していた。室町政権の外交活動は、遣明使も遣朝鮮使も京都五山周辺の禪僧によつてのみ支えられていた訳ではない。京都を出発する使船の旅は、兵庫や堺から出発した後、瀬戸内海から北部九州地域の港町の禪寺に寄港しながら大陸を目指したし、「伊藤幸司 2002」、使船の艦装は博多や兵庫、堺などの貿易商人によつて担われていた。この結果、使節の構成員へもこれらの港湾都市に展開する禪宗勢力の禪僧が多く乗り込んでいたのである。既述したように、中世日本最大の國際貿易港博多では、平安末期以来、禪寺を紐帶として海商と禪僧とが密接な関係を形成しており、禪寺が港湾都市の貿易センター的役割を果たしつつ、通交貿易の人的資源を輩出していた。このようない実態は、瀬戸内海沿岸から九州地域の貿易都市でも少なからず確認することができる。そして、博多のような港湾都市で積極的に勢力を展開していたのが聖一派、大應派、大覺派など夢窓派以外の門派であった。この結果、例えば、足利義持が日明関係を断絶した後、義教が日明通交を復活させる使節（第九次永享四年度の遣明使）として正使に抜擢したのは博多聖福寺の龍室道淵（大覺派）であり、文明年間の堺発の遣明船では当地で教縁を拡大する聖一派寺院勢力が密接に

関与していた「伊藤幸司 2002a」。この傾向は、幕府・五山の財政が凋落し、独自の使節経営に堪えなくなった一五世紀中葉以降、室町政権が日明勘合を社寺や大名に切り売りし「橋本雄 1982」、朝鮮へ特定寺院のための大藏経求請を行うようになると「関周一 1997」、より顕著となる。遣明船であれ遣朝鮮船であれ、渡航証明書を獲得した者（社寺や大名）が実質的な使船の経営者として、自らの意を受けた外交僧を抜擢したからである。そして、そのような経営者には独自の外交僧を抱える大内氏のような地域権力もいた。

当該期の日本では、大内氏のようにも室町政権以外でも外交活動を展開する地域権力が存在した。大内氏は、一四世紀末期に倭寇問題を契機として高麗・朝鮮との通交関係を独自に樹立し、一五世紀中葉以降は日明勘合を獲得して遣明船に参画し、琉球通交も展開した。この広範な外交活動を支えたのが、博多の禅寺・禪僧であり、根本領国ともいえる防長（周防国・長門国）地域の禅寺・禪僧である。聖福寺・承天寺・妙楽寺に代表される博多の禅寺には、平安末期以来蓄積相伝される対外交流のノウハウが存在し、創建以来、有力貿易商人から支持されていたため、大内氏はその人的資源を獲得するべく博多支配を目指し、禅寺との直接的関係を形成することで外交活動の人的基盤とした。一方、防長地域にも博多の禅寺と緊密なネットワークで結ばれた禅寺が存在した。大内氏の徵用した禅宗勢力は、室町政権と密接な夢窓派ではなく、聖一派・大應派・大覺派・幻住派などのいわゆる「博多禪」構成門派であつた。これらの門派ネットワークは、瀬戸

内海の港町や京都五山とも強固に結び付くのみならず、内部に多くの貿易商人を抱えていたため、大内氏の外交活動を支える存在として申し分なかつた「伊藤幸司 2002a・第二部」。

また、室町政権が「外交機関としての五山」の中枢として相国寺の庵苑僧録や蔭涼職を位置付けたように、大内氏の下にも「大内氏の外交機関」ともいえる保寿寺（ほじゅじ）という禅寺が本拠地山口にあつた。保寿寺（現在廃寺）は、大内一族によつて創建され、歴代住持は大内一族の禪僧が就任する大内氏の菩提寺（大内教祐）の一つである。大内氏の私寺ではあるものの、歴代住持は京都五山で修行しており、その個人的人脈から同寺は中央と地方を跨ぐ広範なネットワークを有していた。同時に、保寿寺は外交僧の育成機関的意味合いもあつた。特に、第二世住持以參周省は、癡鈍妙穎（大内師弘の子・夢窓派寿寧門派）の法を嗣ぎ、京都相国寺で修行しつつも、一時俗縁の叔父である勝剛長柔から外学を学ぶために東福寺にも掛け搭し、さらに永平下曹洞宗の密參をも受けた人物で、京都五山とのパイプも太く、大内政弘・義興父子から深く帰依された。彼が、大内氏から朝鮮国宛ての外交文書を作成していることからすると、保寿寺住持の職掌の一つに外交文書の起草があつたのであろう。大内氏は独自に朝鮮・琉球通交を展開していたため、自ら外交文書を用意する必要があつたが、その役割は保寿寺のような領国内の禅僧のみならず、場合によつては京都五山の禅僧を招聘することで解決していた「伊藤幸司 2002a・第二部」。保寿寺に代表される大内氏の菩提寺からは、梅屋宗香（乗福寺・大内弘幸・弘世の

菩提寺)、提点永扶・心月受鑑(香積寺)・大内義弘の菩提寺)、法泉寺住持某(3) (大内政弘の菩提寺)のように、大内氏の外交僧が多数輩出されており、菩提寺群も大内氏外交の人的基盤となっていたのである。そのなかにあって、「大内氏の外交機関」ともいえる保寿寺は、大内氏の外交活動において菩提寺群の頂点的位置にあつたと思われる。

なお、大内氏の外交を中枢で担う禅僧には、以參周省のように夢窓派・聖一派・曹洞宗など多様な門派を兼修する密參禅をしている者が多く、例えば周防定林寺の春湖(しゅんこ)清鑑(きよげん)や赤間関永福寺の桂庵(けいあん)玄樹(げんじゅ)らがいる。彼らは、密參という形態で多様な門派のネットワークを獲得しており、この性格が外交ネットワークの拡大にも繋がっていたものと推察される〔伊藤幸司 2002a・第一部〕。

こゝに見る大内氏と外交僧のあり方は、大内氏と同じように独自の外交活動を自論なんだ地域権力でも確認することができる。ここでは、特に九州の大友氏と宗氏の事例を挙げておく(島津氏は第四章で詳述)。大友氏の外交僧で著名なのは、第一次(1503年)の遣明使の際、六号船の大友船に乗船した斯立光幢(すりこうじょう)である。彼は京都東福寺の禅僧で、大友親繁によつて豊後勝光寺へ招請された。大友氏は、鎌倉期から聖一派との密接な関係を形成していたが、特に斯立光幢の所屬する聖一派(三聖門派)が豊後への展開を果たしていった。入明し、寧波の文人との交流を果たした彼は、帰國後、東福寺住持に出生し宝勝庵を開創している。宝勝庵は、彼の弟子筋の拠点となつたのと同時に、以後、大友氏や大内氏の外交活動を支

持する「菩提寺」(提点永扶・心月受鑑) (香積寺)・大内義弘の菩提寺)、法泉寺住持某(3) (大内政弘の菩提寺)のように、大内氏の外交機関」ともいえる保寿寺は、大内氏の外交活動において菩提寺群の頂点的位置にあつたと思われる。

伊藤幸司 2002a・第一部第1章
2009]。

対馬宗氏は、その地理的要因から、高麗以来、朝鮮半島と頻繁な通交貿易を行つてゐる。一三九二年、新たに朝鮮王朝が誕生すると、朝鮮は倭寇問題解決のために日本列島の多様な通交者を受け入れる懷柔政策を執つた。しかし、増加する倭人たちの接待費用が財政を圧迫するようになつたため、世宗期以降、様々な通交統制策を導入することで、渡航者の峻別を行つた〔中村栄孝 1965・第一章〕。なかでも、日本側通交者に書契(外交文書)や対馬島主文引(朝鮮渡航証明書)の携帯を義務付ける「書契による統制」や「文引の制」は、日朝通父における宗氏の重要性を決定的にする一方、宗氏に外交文書起草能力を有する人物の確保を促した。さらには、一四四〇年代対馬島主蔵遣船を五〇船に制限する癸亥約条が成立すると、宗氏は縮小した通交権益拡大のために、通交名義を詐称する使節(偽使)を創出することで貿易利潤の確保を自論んだ。宗氏の偽使創出活動は、日本国王や有力地域権力の通交名義のみならず、架空人物の名義をも騙る組織的で大規模なものであった〔長節子 2002a・第一部・2002b〕〔橋本雄 2005〕〔伊藤幸司 2005〕〔荒木和憲 2007〕。それ故、故実や修辞技術を駆使する本格的な外交文書の起草(改竄や偽造も含む)能力と、偽使を朝鮮側に露見させないための外交折衝能力を持ち、かつ朝鮮通交を熟知する外交僧の確保が不可欠となつた。このため、一五世紀中葉、宗氏は日本国王使の副使として朝鮮に赴いた天龍寺の仰之梵高(夢窓派

華蔵門派)を対馬に招聘し、外交文書の起草に従事させた。彼の招聘によって、宗氏は高度な漢文起草能力と京都五山に通じる窓口を確保したのである〔橋本雄 2005・第1章〕〔伊藤幸司 2002・第1部1-1章、2003-1〕。

応仁・文明の乱後、長年敵対関係にあった宗氏と大内氏の間で軍事的和睦が成立すると、大内領国を含む玄界灘地域の外交僧が宗氏の外交活動（偽使派遣活動）を支えるようになる。宗氏の外交僧にも、臨済宗と曹洞宗の二重僧籍者性格を有する対馬国分寺の景林^{豊林}のように、大内氏の外交僧の特徴を合わせ持つ者や、博多とのつながりを有する者が確認できるようになる。宗氏は、博多を支配する大内氏との関係改善によって、博多商人の貿易資本や市場のみならず、外交僧という人的基盤をも確保する」とに成功したのである〔伊藤幸司2002b〕。

軍權力が〈足利義稙—義維〉系と〈足利義澄—義晴〉系に分

（外交資格証明手段としての日明勘合と日朝牙符）も、両陣営が一元的に掌握しておいた外交符號も、この結果、宣明使が一方的に宣揚してしまった。

當によつて自身の求心力確保の目的で九州地域の地域権力にばらまかれ、中世後期における日本の国際関係の主軸が、幕

府外交》から《地域交流》へと転回した〔橋本雄 2005・第5章〕。このことは同時に、「外交機関」と「外事官」が定義される

としては事実上解体に向かい、博多周辺の禅宗勢力が外交の

船に強い影響力を及ぼした大内氏や、偽使通交によつて朝鮮

外交権を集約しつつあった宗氏らが、博多聖福寺を拠点に展開していた臨濟宗幻住派を外交僧として起用した結果、同派が一六世紀の外交を担う主力となつた[長正統1963]。[伊藤幸司2002a・第三部第一章]、「橋本雄2005・第五章」。幻住派は、丹波高源寺を本寺とする一派であるが、[玉村竹11-1979]、「橋本雄1999-2000a」、南北朝期には既に博多聖福寺でも受容されていた。一六世紀の日本禪宗界では、従来の門派の粹組みを超える密禪が隆盛化し、そのなかにあって幻住派は従来の門派ネットワークを再編する特徴を備えていた[川本慎自2003]。大内氏が經營した第一八次天文七年度の遣明船正使湖心碩鼎や、対馬の外交機関ともいえる以配庵の開祖で朝鮮通交を担つた景敷玄蘇は、いざれも博多聖福寺ゆかりの幻住派禪僧であり、入明記「初渡集」「再渡集」を著した天龍寺妙智院の策彦周良(夢慈派華嚴門派)も同派周辺で活躍する外交僧であった[伊藤幸司2002a・第三部第一章]。

【中国・朝鮮・日本の外交使節のあり方

*琉球に関しては第四章参照

國名	元	朝鮮	交渉相手	使者のあり方
明	日本		官人	官人 → 禅僧
高麗	日本	日本	官人	官人 → 禅僧 + 天台僧 → 官人
元	日本	明	官人	官人
室町政權	官人	室町政權	僧侶 → 官人	僧侶 → 官人
九州探題・大内氏 etc.	官人			
官人				

日本	対馬宗氏	官人（受職人も含む）
（室町政権）	明	禪僧 + 天台僧 → 禪僧
（大内氏）	朝鮮	禪僧
（対馬宗氏）	朝鮮	俗人 or 禪僧

一四世紀後半以降、東アジア世界の地域交流は国家間外交、もしくは国家を交渉相手とする交流が主流となる。この形態の交流は、それまでの民間交流とは異なり、外交文書を携帯し、外交儀礼や高度な外交折衝を遂行する必要があるた。

1 外交文書の起草

外交文書は、外交上、不可欠なアイテムであり、その起草には一定程度の知識と技術を必要とした。

（遺明表の作成）足利義満の冊封以前の段階では、公家が対明通交の国書を起草していた。しかし、一四〇二年に義満が日本国王に冊封されて以後は、京都五山系の禪僧を外交文書の起草者に位置付けた。それまでの対明国書は、明皇帝に臣従し献上する形式である表文で書かれることが多かったが、冊封を受けた以上は「日本国王」号を使用した表文形式の国書（遺明表）を携行する必要があった。伝統的対外観や

神国思想を強く抱く公家がそのような遺明表を起草する」とはあり得ず、その意味でも明との密接な関係を有する夢窓派を中心とする京都五山系禪僧の出番であった。[橋本雄 1998b]、[2000b]。室町政権は、既に高麗・朝鮮宛ての外交文書を春屋妙葩らに起草させており、ここに日明・日朝外交文書を司る「外交機関としての五山」が整つたことになる。

遺明表の起草は、鹿苑僧録の経験者が多いものの、必ずしも禪録の職掌という訳ではなく、五山の学統や個人の能力によつて起草者が決定された。[田中博美 1987]。特に、遺明表は四六駢儼文を駢使した文体で起草することが求められていたため、明初に季潭宗勦から蒲至疏法を伝授された絶海中津の学統「玉村竹」[1966]が起草者になつていた。[橋本雄 1997]。遺明表では、日本国王たる室町殿の名前之上に明かに下賜された「日本国王之印」の金印を捺す。金印は、田中健夫と共に公方御倉に保管され、使用に際しては蔭涼軒主が

室町殿の面前で行い、室町殿の封を必要とした。[田中健夫 1982・第一部第三章]。

（書契の作成）日朝間で取り交わされる外交文書を書契といふ。書契は、私的な漢文書簡の流れをひく公的な外交文書である。書契は、文字の大きさ・書き出し位置・平出・擡頭・紙厚などで発給者と受給者の微妙な関係を可視化するアイテムでもあり、[伊藤幸司 2002c]、[米谷均 2002]、書契作成者はこの点を勘案する必要があった。

室町政権では、僧録の肩書きを有した春屋妙葩が高麗への返書を作成して以後、遣朝鮮国書の作成権は鹿苑僧録にあつ

たが、文正年間以降は蔭涼職にその職掌が移動した。遣明表のようすに特殊な文体ではなく、単なる書簡型文書であった遣朝鮮国書は、起草僧の選定も比較的こだわりがなかったが、清書は能筆の僧に行わせていた。国書に捺される「徳有鄰」印は、蔭涼軒御倉に保管され、蔭涼職自身かその会下の僧が捺印をした。遣朝鮮国書の作成は、遣明表と比較すると扱い方が低かった。^{1997]}

一方、大内氏は、「大内氏の外交機関」ともいえる山口の保寿寺住持以參周省や、京都五山から周防に下向して來た文筆僧（岐陽方秀・梅屋宗香）らに書契の作成を委ねていた^[伊藤幸司 2002a・第二部第三章]。宗氏は、京都五山系の仰之梵高を招聘した以外にも、明人秦盛幸を起用して文引・書契の作成を任せていたが、博多を掌握する大内氏との関係が改善された後は、博多の禅宗勢力（幻住派禪僧）を積極的に活用した^[伊藤幸司 2002b]。

（外交文書の偽造と改竄）一四世紀末期～一七世紀前期における日本の外交は、偽使の時代でもあった。特に、日朝通交の場では、多くの書契が偽使派遣勢力（対馬・博多勢力が主導）によって改竄されたり偽造された。それは、日本国王の国書であろうと琉球国王の国書であろうと例外ではなかつた。書契の改竄・偽造の遂行に際しては、外交文書に関する専門的知識が不可欠であり、その行為は博多や対馬の外交僧によって支えられていた^{[田代和生・米谷均 1995] [米谷均 1997] [橋本雄 2005] [伊藤幸司 2005]}。

一方、厳格に準備・管理される遣明表の偽造や改竄は稀で

あり、大内氏が經營を独占し、事実上最後の正式な遣明船となつた第一九次天文一六年度の遣明使の時に、大内氏が偽造したことが分かっている。この時、正使に任命された策彦周良が、遣明表や別幅（朝貢品リスト）の作成方法について「天文十二年後渡唐方進貢物諸色注文」（妙智院所蔵）^[伊藤幸司 2006c]という史料のなかで触れている。これに拠ると、日本国王之印の「在所」は口伝となつており、遣明表への捺印は山口の大内館で保寿寺住持彦明梵良（大内政弘の子、以參周省の弟子）が行つた^[伊藤幸司 2002a・第二部第一章]。この時に使用された「日本国王之印」は偽造印であり、現在毛利博物館に所蔵される本印がそれに相当すると推測されている^[橋本雄 1998a]。

（外交故実の集積）国家外交を安定的に遂行するためには、改善された後は、博多を掌握する大内氏との関係が新たな秩序に基づいた外交故実を集積し、知識と技術の継承を図る必要がある。そして、このよくな動きは当事者たる外交僧のなかから発せられた。第一二次應仁度の遣明使の遣明表を起草した瑞溪周鳳は、自己の経験を元にして、外交の先例・固規を調査し、後進に示す指南書を遺す目的で日本初の外交文書集『善隣國宝記』を編纂した^[田中健夫 1959・第六章／1995]。以後江戸期以降も外交文書作成の担当者によつて『江雲隨筆』・『異國日記』（南禅寺金地院の以心崇伝）・『本邦朝鮮往復書簡』・『続善隣國宝記』に代表される指南書や参考書、文書集が多く作られているのは、京都五山系の外交僧のなかに先例を書き留めて後世に伝えようとする明瞭な意識があつたことを示している^[田中健夫 1996]。

遣明使として渡海した外交僧のなかには、入明記を残した者もいる。入明記には、『入唐記』(第一)一次遣明船從僧笑雲瑞訥(さううん・まいん)・『戊子入明記』・『壬申入明記』・『初渡集』(第一)八次遣明船副使策彦周良(さくげんしゅうりょう)・『再渡集』(第一)九次遣明船正使策彦周良(さくげんしゅうりょう)の五種類がある。このうち、『戊子入明記』は第九・一一次遣明使【伊川健】(2007・第二部第一章)・『壬申入明記』は第一六次遣明使の関係史料を収載している。内容は、進貢品・輸出品リスト、搭乗員リスト、外交折衝過程で発給した文書等など多岐にわたっている。一方、『入唐記』【伊藤幸司】(2006b)・『初渡集』・『再渡集』(4)【牧田諦亮】(1955)は、外交使節の日から記された渡海日記である。これらは単なる日記ではなく、明における外交交渉過程やそれに付随する往復書簡の写し、日本の禅僧が憧れる寧波・北京間の名刹・名所などが的確に記されており、その後の遣明使が参考すべきものであった。瑞溪周鳳が『善隣國宝記』の附録として『入唐記』を所載しようと考えたことは【田中健夫】(1995)、入明記に外交故実書としての意味合いがあつたことを証明している。特に、一度の入明を果たした策彦周良は、遣明使関係の史料収集を精力的に行っており、現在、その多くが天龍寺妙智院に伝来している【牧田諦亮】(1955・1959)【伊川健】(2004)。また、表現の仕方は異なるものの、船舟等楊が入明時に描いたとされる「唐土勝景図巻」や「國々人物図」もヴァイジュアル版入明記のようなものであり、故実的意味合いが少なからずあつたものと考えられる【島尾新

2 異国へ渡る外交僧

実際に異国へ渡海し外交折衝を行う外交僧は、五山禪宗界において外交文書起草者より一段低いランクに属する禅僧と考えられている【村井章介】(1988・第二章)。外交使節としての外交僧の役職には、遣明使の場合、正使・副使・綱司・居座・土官・從僧がある。このうち、綱司・居座・土官は貿易実務を司る官職で【小葉田淳】(1941・第五章)・綱司・居座は禅僧が、土官は俗人が任命される場合が多いものの、桂庵玄樹のよう禅僧が土官に就任する場合もあつた。綱司は常設ではなく、臨時的な官職の可能性が高い。一方、朝鮮へ派遣される使節は、禅僧であれ俗人であれ正官人・副官人と呼称された。

遣明使の選任は、一般的に蔭涼職が官員の候補者リストを参考に奏上し、將軍から承認をもらうことで決定した【湯谷稔】(1984)・【橋本雄】(1997)。候補者には、渡海経験者や、日明勘合を獲得し遣明船の運営を任せられた經營者から推薦された者などが名を連ねた。遣明使の首脳部は、出発前に將軍に賄乞し、帰國後は正使が報告を行つた(第一九次遣明使は大内義隆に対して行つてゐる)。また、重要な朝貢・貿易品としての硫黃調達のために、室町政権は禅僧を硫黃使節として任命し島津領国へ派遣している【小葉田淳】(1976・第七章)。一方、朝鮮への使節選任は、室町政権の場合は特に規則はなかつた。日本国王使の多くは、特定寺社の大藏經求請目的で

渡海することが多く、国王使の運営許可さえ獲得すれば、使節の経営は請経主体の寺社側が独自に行つていたからである【橋本雄1997】。また、大内氏や宗氏などが派遣する使節の選任については、関係史料が少なく詳細は不明であるが、大藏経求請を目的とする使節の場合には、寺社側の要請に基づき当該寺社の関係僧侶等が渡海することが多かつたようである【中村栄孝1965・第一七章】。遣明使と遣朝鮮使の違いには、形式上、遣明船正使に五山出世者（坐公文含む）が就いたのに対し、遣朝鮮使にはそのような先例がなかった。なお、遣明使のなかには、明朝の官職や明朝禪宗界の地位を獲得して帰国する者もいた。こうした職位は名目的ではあるが、日本禪林において一定程度のステータスとして認知されていたようで、大陸への憧憬を抱き続ける禅僧の内面を窺うことができる【伊藤幸司2010】。

遣明使や遣朝鮮使の派遣が継続して行われるようになると、渡海外交僧のなかには何度も使節に選任され、外交経験豊富な専門的外交僧もいえる禅僧が登場するようになる。例えは、堅中圭密（仏光派）は第二次・第五次・第六次・第八次遣明使の正使を勤め、肅元寿嚴（夢窓派・靈松門派）は第一次遣明船正使の東洋允憲の弟子で従僧として入明後、第二次遣明使居座・第一三次遣明使従僧・第一四次遣明使居座として四回の入明を果たした。実践的な外交経験を積んだ彼らは、帰国後、蔭涼職の龜泉集証から日明勘合の先例について尋ねられることもあった（『蔭涼軒日録』長享元年一〇月二九日条）。このような事例は他にもあり、肅元寿嚴と同じく

第一四次遣明使居座として入明した東帰光松（聖一派・三聖門派）が鹿苑僧録景徐周麟から遣明船の麥遷について問われ、詳細な返答をしている（『鹿苑日録』明応八年八月六日条）。

貿易実務を担う居座には、禅寺を経営的側面から支えた東班僧がその経済的手腕を請われて選任されることも多い。例えは、妙増都聞（夢窓派・華藏門派）は永享年間の第九次か第一次・第一次・第二次遣明使の居座に就き、「上村觀光1973」【伊藤幸司2002a・第一部第二章】、博多で貿易物資調達に勤しみ、幕府船や天龍寺船の要人として活躍した。しかし、西班牙（おもに宗旨修行的側面を担当）でも経済的手腕に優れれば東班僧並みの活躍をする者はおり、取龍首座（聖一派）は文明年間の第一一二次・第一三次遣明使の居座として乗船し、特に後者の遣明船では堺商人と結託し、事實上の経営者として遣明船史上唯一となる内裏船を運営した【伊藤幸司2002a・第一部第一章】。

朝鮮通交の場でも、例えは梵齡は日本国王使として四度渡海し、芸文提学尹淮からその功績をたたえる跋文を詩巻に貢えは、堅中圭密（仏光派）は第一次・第五次・第六次・第八次遣明使の正使を勤め、肅元寿嚴（夢窓派・靈松門派）は第一次遣明船正使の東洋允憲の弟子で従僧として入明後、第一次遣明使居座・第一三次遣明使従僧・第一四次遣明使居座として四回の入明を果たした。実践的な外交経験を積んだ彼らは、帰国後、蔭涼職の龜泉集証から日明勘合の先例について尋ねられることもあった（『蔭涼軒日録』長享元年一〇月二九日条）。このような事例は他にもあり、肅元寿嚴と同じく

る〔上田純 2000・第一章第一節〕〔伊藤幸司 2002a・第一部第三章〕。宗金は、使送僕人・受図書人として独自に朝鮮通交貿易を行うのみならず、一四二九年には日本国王として朝鮮へ渡海し、第九次永享四年度の遣明使として入明した〔佐伯弘次 1999〕。彼の末子の性春（おそらく禪僧）も第一次応仁度の遣明使の土官として入明し、一四七五年には日本国王使として朝鮮へ渡っている〔有光保茂 1937〕。一方、文渢正祐は一四二九年に九州探題渋川氏の使者として朝鮮に渡海した後、再度渡海、永享年間には遣明船に乗船して入明し〔伊藤幸司 2005〕、一四四八年には日本国王使として朝鮮へ再々渡航した〔村井章介 1995・第四章〕。このように、博多周辺には一国間に跨って活動する外交僧があり、当該地域が実践経験豊かな外交僧の宝庫であることが分かる。それ故、大内氏や宗氏も彼らを起用した結果、同一人物が大内氏と宗氏の外交僧になる」ともあった〔伊藤幸司 2002b〕。同じように、室町政権の外交活動も彼ら博多勢力に依存せず遂行することは不可能であった。しかし、室町政権のこうした外交態勢こそ、幕府の外交面におけるイニシアティブの限界性を示しており、朝鮮通交において偽使創作を可能たらしめる歴史的・構造的背景となっていた〔伊藤幸司 2002a・第一部第三章〕（5）。

3 異国における折衝

外交僧の資質が最も問われるのは、異国での外交折衝の場である。外交折衝では、自らの要求を実現するために様々な

手法を用いる。時には、寧波の乱のように暴力に訴える」とや、ハンガ…ストライキをすることで要求を無理強いしよう〔村井章介 1997・第三部第一章〕と試みる」にもおいた。しかし、多くの場合は短疏（短書）や漢詩文を通じて意思の疎通が行われた。特に、短疏とは外交文書とは異なる略式に作製された漢文文書であり、一種の陳情書的性格を帶びていた〔米谷均 1998〕。

例えば、一四二二年に朝鮮へ渡航した源省（田平省）の正使秀領の交渉を挙げてみよう。

源省正使紹秀領，在館呈書于礼曹曰、「前日、差使貢以執事之命、三品其硫黃、來日、「比乎此、而居其上中者藏之、其下者除之」、今源公所貢硫黃、亦雖有上中下三品、既及数千觔、故暫置之於富山浦、以俟聞執事之命矣、僕竊以源公畏大國之威、不遑寧處、脣議宵思、願欲忠大國、故不遠万里之重溟、奉不勝、土宜、以表其至誠、大國、以貢物不精、不受之、則絕下邑之好也、僕聞之、昔者桓伐楚、問包茅之不貢、但責其貢不納、而不論貢之精疎、楚大國也、豈無善於包茅者、蓋尚其貢而口矣、下邑之疏黃、既是楚國之包茅也、伏翼悉納、以為下國之貢、幸甚」〔世宗实錄〕五年六月庚午条〕

右の史料は、秀領らが持ち込んだ硫黃について、朝鮮側がその品質を上中下の三段階に区分けし、質の悪い「下」の硫黃は要らない旨を言つたところ、秀領は、源省が如何に朝鮮を大国として敬い忠節を尽くしたいと願つていてるかというのとを主張することで朝鮮側の歓心を誘ひ、さらに「昔、齊の

及、往昔以来、
鎮府之於日人等、猶如父母、々々豈無舐犢之愛乎、伏
希、

老公々々与列位、共議、速蒙許諾、茲聞、

公々、近日回帰燒於杭州、然則他時異日、生等、憑誰

開告訴之口哉、故寧白、
嘉靖十八年六月 日

正使 積鼎
副使 周良

居座等
土官 正頼

居座
土官 増重

通事 吳榮

鎮守老公々 台前

この時、策彦周良ら一行は、寧波の乱後に入明した日本人とい
うことで明から著しい警戒を受け、湿氣の多い嘉賓館とい
う接待所に閉じ込められ、自由な外出もできないまま、北京
への上京許可が降りるのを待たれていた。しかし、余りの

劣悪な環境により、病人が続出し死人も出る有様であったた

め、彼は待遇の改善と早急な上京許可を陳情した。その際、
上京の許可が遅延すれば、帰国の航海に不可欠な順風の季節
を逃してしまった旨を強調している。ここに見る「明年帰國、
必失順風節」の類のフレーズは、日本の遣明使が明側との交
渉事を促進させたい時に使う常套句であり、遣明使の短疏に
は類似の文言が頻出する。この事は、短疏を作成する外交僧

が、交渉時に有効な短疏の言い回しを知識として把握してい
たことを明示する。また、日記に控えられる短疏が平出や擔
頭箇所を忠実に復原しているのも、より正確な故美の蓄積を
目的としていたからだと推測される。そして、その具体的な
蓄積の結果が、各種人明記であつたのである。

外交僧は、当然ながら貿易物品以外の文物の移入にも携
わっていた。特に、書籍の輸入に関わる彼らは、室町期日本
の知性を担っていたともいえる【國原美佐子2003】。明代に
成立した「医書大全」のような貴重書が、早くも文明年間の
堺で確認できるのは【庶軒日録】文明一六年四月七日条)、
彼らに拋る所が大きい。一方、策彦周良のよう禅僧であり
ながら仏書よりも類書や詩文集の入手に努力する外交僧も多
く、その興味は多岐に渡っていた。遣明使が帰国すると、外
交僧を通じて唐墨や唐筆など小物の唐物が巷に出回った。こ
れらのなかには、彼らが寧波などで買いために大陸
の士大夫(例えば寧波の文人)と親密な交流「海老根聰郎
1975」をして贈答されたものもあった。

四 琉球王国と中世日本

中世日本からみて異国であった琉球では、三人の王が存在
する三山時代を経て、一五世紀前半に中山王が三山を統一し
琉球王国が成立する。琉球は、明朝成立間もない頃から朝貢
関係を形成するのみならず、明から大型海船を賜与された上
に人的な支援・優遇を受け、明の海禁政策が施行された東ア
ジア海域の諸地域を結ぶ中継貿易で繁栄した。この東アジア

を跨ぐ広範な通交貿易活動を支えたのが、いわゆる闇人三十六姓と呼ばれた久米村の在琉華人である。彼らは、福建地域の出身者が琉球の朝貢活動を支援するために明から派遣されたという伝承を持ち、彼らの居留する久米村は那霸港の一角にあつた。彼らの役割には、外交文書の作成、通事、外交官として渡海することのほか、進貢船の船長（火長）や水夫などがある。当該期の東南アジアの港中国家には、久米村人のよな在留華人が点在しており、琉球王国の中継貿易はこれら華人ネットワークを最大限に活用して行われた。琉球王国の外交機関ともいえる久米村では、『歴代宝案』と呼ばれる外交文書集も作られており、外交故実の蓄積も為されていた

【畠中倉吉 1998】。

ところが、『海東諸國紀』「琉球國之圖」の那霸の説明で「江南・南蛮・日本の商船の泊まる所」とあるように、琉球王国は日本とも通交関係を持っていた。しかし、『歴代宝案』には日本関係の文書が全く収載されておらず、久米村の在琉華人は対日外交には携わっていなかつた。琉球王国の対日外交を司っていたのは禪僧である。琉球への本格的な禪宗の流入は、一五世紀中葉の京都南禪寺語心院の徒芥隱承琥（かくいしんく）の渡琉から始まる。彼は、琉球国王の篤い帰依を得てし、天界寺や天王寺など多くの禪寺を開創した。そして、一五世紀末期、首里城に隣接する地に尚王家の菩提寺で琉球最高位を誇る円覺寺が成立し、住持が琉球禪僧を統制管理する僧録を司る頌菊（じくぎく）宗意（（六〇九年・徳川家康「伊藤幸司 2002a・第三部 1993・第五章第二節」）など琉球禪林の禪僧が起用されているが、彼らの

の禪寺が多く作られた背景には、対日外交を司る外交僧確保の意味合いもあつた【知名足寛 2000】。日本人鑄物師が製作した和鐘を装備する琉球の禪寺は、琉球王国のなかで「ヤマト」的なモノを示す装置でもあつた。琉球へは多くの日本僧が渡琉し、同時に多くの琉球僧が日本に参学するなど、日琉禪林相互の交流が活発に行われていた【小葉田淳 1993】。眞實齋（1993・第五章第三節）【村井章介 1995・第五章】「伊藤幸司 2002a・第三部第一章」。那霸には、日本から渡琉しやきた禪僧をはじめとする日本人たちが居住し、日本の宗教施設が立ち並ぶ倭人居留地も形成されていた【上里隆史 2006】。

琉球王国では、琉球僧録（当初は天王寺住持、後に円覺寺住持【伊藤幸司 2002a・第三部第一章】）が外交担当部局の性格を有していた【村井章介 1995・第五章】。琉球王国から日本へ発給される外交文書は、基本的に和様漢文や仮名が使用された日本の中世文書の文体であり【佐伯弘次 1994】。その作成に当たつていたのが琉球僧録や琉球王府に登用された日本人であった。日本への外交使節（琉球国王使）には、芥隱承琥（一四六六年・足利義政）、天王寺住持檀溪全叢（だんじきぜんそう）（一五二六年・足利義晴）、建善寺月泉和尚（一五五六年・島津忠良・貴久、『旧記雜錄』後編卷一・附錄一卷一〇）、天界寺修翁和尚（一五七七年・島津義久、『旧記雜錄』後編卷九）、天龍寺住持桃庵祖昌（一五八九年・豊臣秀吉）、西来院菊隱宗意（（六〇九年・徳川家康「伊藤幸司 2002a・第三部第一章」）など琉球禪林の禪僧が起用されているが、彼らの

多くは日本からの渡琉僧（芥隱・元京都五山系禪僧、檀溪・薩摩出身）か、京都・堺などの日本禅林に参考（菊隱・大徳寺北派に歴參）した経験を有していた。琉球の使節には、日本から渡琉し琉球側で雇用されていた通事（禪僧や俗人）も存在し、琉球語を島津氏側の重臣に通訳する場合や、「上里隆史 2006」、時には「和言」「倭俗」に通じているという理由でメンバーに抜擢される者もいた〔伊藤幸司 2002a・第三部第一章〕。

一方、室町政権における琉球王国への対応は、「外交機関としての五山」の役割という説ではなかった。

徒琉球国書云

眼(言上)

毎年為御礼令啓上候間、如形奉捧折紙候、隨而去年進上仕候両船、未下向候之間、無御心元存候、以上意旨出度帰島仕候者、所仰候、諸事御奉行所へ申入候、定可有言上候、誠恐誠惶敬白、

応永廿七年五月六日 代主印

進上 御奉行所

十月到来

この文書は、室町政権（足利義持）に対する琉球国王使が携えた琉球代主国書である（⁶）。宛所が御奉行所となつていることが注目される。室町政権は、琉球国王に対して日本国内で使用される御内書様式の仮名書き文書に、日本年号と「徳有鄰」印を捺したものを使っていた。「なれば外国であり、なかば家臣である」という曖昧かつ親近の態度」〔田中健夫 1982・第一部第四章〕であったため、文書様式も透明表

や遣朝鮮国書とは著しく異なつた。そして、瑞溪周鳳の編纂した『善隣国宝記』に琉球国王宛て文書が一切収載されていないことなどを鑑みれば、室町政権は琉球外交を禪僧に委ねておらず、基本的に「外交機関としての五山」の管轄外であつたと推測する。一五〇九年、室町政権（足利義稙）が琉球王国に接触を試みようとした際、義稙政権を支える公家阿野季綱は五山系の禪僧ではなく公家衆の重鎮三条西実隆に「琉球国事書状之礼等」を尋ねている〔実隆公記〕永正六年四月二八日条）。この点からも、室町政権の琉球外交における文書起草は禪僧の專権事項でなかつたことが明らかである。また、室町政権は琉球王国に直接使節を派遣することはなく、来日する琉球国王使や薩摩島津氏を介しての接触であつた。この点、室町政権が明や朝鮮とは異なる複線で琉球王国を見ていたことが分かる。

しかし、室町政権とは異なり琉球王国と直接通交を行つていた大内氏や島津氏は領国内の禪僧を外交僧として起用していた。大内氏の場合、例えば徳雲軒源松なる外交僧が琉球渡海するのみならず、天界寺を琉球における窓口的役割に位置付け、同寺を通じて外交折衝を展開していた。天界寺を琉球の窓口とする勢力には、大内氏と密接な島津豊州家もいた〔伊藤幸司 2003〕。一方、島津氏における外交僧の具体的な活躍は、島津忠昌による桂庵玄樹の招聘を函期とする。桂庵玄樹は、朱子学の一学派である薩摩学派の祖として著名であるが、同時に当該期における第一級の外交僧でもあつた。赤間関出身の彼は、京都五山で修行した後、聖一派龍吟門派僧

として赤間関永福寺に住していたが、第一二二次応仁度の遣明使で大内船（三号船）土官として抜擢された。彼の任務は、大内船の最高責任者として大内氏の貿易活動を円滑に行うことについた。大内船は、往路の呼子浦で悪風に遭遇して積荷の流出被害が出たものの、桂庵玄樹はこれを理由として明に賜物加増要求という外交折衝を展開し、銅錢五〇〇貫を獲得している〔小葉田淳1941・第三章〕。この時の大内船には、水墨画で有名な雪舟等楊も乗船していた。桂庵は帰國後、雪舟と同様、九州地域を遍歴したが、それを島津忠昌（島津奥州家）が薩摩に招聘した。招聘の背後には、優秀な学僧を招いて当地での宋学の隆盛を図るという文化的側面以上に、島津氏の対琉球政策が関係していたと考えられる〔伊藤幸司2002a・第一部第三章〕。当該期、島津氏は室町政権・琉球間の仲介者として、また南九州の支配者として琉球との外交関係の緊密化を必要とするようになっていた〔荒木和憲2006〕。島津氏は、大内氏の外交活動を担い、外交文書起草に不可欠な宋学の知識に精通する桂庵玄樹を迎えること、対琉球交渉に必要な実践的外交知識の獲得を試みたのである。彼は延徳年間には、日向の島津忠廉（島津豊州家）にも招聘されている。豊州家は独自に琉球との関係を形成するなかで、大内氏の琉球通交や遣明船派遣活動も補佐していた。この両者を結び付けていたのが、桂庵玄樹でありその弟子である外交僧月渚英乗であった〔伊藤幸司2003〕。

以後、南九州地域では桂庵玄樹の弟子筋から外交を担う人材が輩出されることで、外交僧の人的供給拠点として成長し

た。その代表が、雪岑津興（仏光派）であり、桂庵玄樹の四世孫文之玄昌である。雪岑津興は、島津氏重臣町田一族で伊集院広済寺住持の時に使僧として琉球へ渡海するのみならず〔村井章介1995・第五章〕〔伊藤幸司2002a・第三部第一章〕、カンボジア国王宛の外交文書も起草している〔鹿毛敏夫2008〕。俗弟に京都大徳寺の蘭叔宗秀がいるので、彼は京都との人脈も有していた〔伊藤幸司2002a・第三部第一章〕。文之玄昌も島津氏の外交ブレーンとして、明・琉球・東南アジア諸国に対して差し給した外交文書を起草していることが、その詩文集『南浦文集』から分かる。その他、島津氏は大隅安国寺住持雪庭西堂（一五〇八年『旧記雑録』前編巻四二）、楞嚴寺住持茂林秀繫（一五六五年以後、『旧記雑録』附録一巻三）等を使節として琉球へ派遣していることが確認できる。琉球の外交僧には、島津領国出身の者や法系的に島津氏の外交僧と繋がる者もおり、薩摩関係は海を越えた禅宗ネットワークを介して行われていた〔村井章介1995・第五章〕。

【琉球王国をめぐる外交使節のあり方】

國名	交渉相手	使者のあり方
琉球	明	官人
	高麗	官人
朝鮮	官人	官人 or 博多商人への委託
南蛮諸国	官人	官人 or 禅僧
室町政権	?	
大内氏		

明	島津氏	官人 or 禪僧
高麗	琉球	官人
朝鮮	琉球	官人 or 倭人への委託
南蛮諸国	琉球	官人 or 琉球国王使に委託
日本 (室町政権) (大内氏) (島津氏)	琉球 琉球 琉球	琉球国王使や島津氏に委託 禪僧 禪僧

おわりに――「外交と禪僧」の終焉――

室町政権が崩壊し、戦国の動乱のなかから新たに誕生した豊臣秀吉の統一政権は、前代と同様、禪僧を外交活動に活用した。相国寺の鹿苑僧録西笑承兌は、豊臣政権の外交僧として東アジアの異域・異国・南蛮・キリシタン国に対しても外交文書起草に当たった〔北島万次 1990・第三章〕。特に、室町政権が禪僧に担当させなかつた琉球国王宛ての漢文文書の起草は、豊臣政権が琉球を朝鮮と同等の完全な外国として扱つていたことを明示する〔三鬼清一郎 1987〕。また、漢字文化圏外のポルトガル領イン・副王に宛てて漢文の外交文書も発給していた〔北島万次 1990・第二章〕。ただし、一六世紀の日本では一五世紀末期の明応の政変を契機として外交活動の主軸が九州地域に移動し、博多聖福寺を拠点とする幻住派禪僧が外交活動を主導していた。豊臣政権は、対朝鮮外交

を対馬宗氏、対琉球外交を薩摩島津氏を通じて行つており、基本的に彼らの外交能力がそのまま政権の外交機能を補完していた。ゆえに、豊臣政権の外交僧の多くも九州地域とネットワークを有する者が多く、さきの西笑承兌も幻住派禪僧の一員であつた。豊臣政権の外交は、それまで外交活動を行つていた勢力をそのまま取り込む形で展開されたのであり、独自の外交機関を確立した訳ではなかつた〔伊藤幸司 2002b〕。豊臣政権最大の外交活動は朝鮮侵攻である。その際、多くの外交僧が知識を活かして文書作成、外交折衝、通訳、イデオロギー操作などの諸面から戦争をサポートした〔北島万次 1990・第三章〕。そして、対馬宗氏や小西行長の軍に従軍した景敵・玄蘇・大荊、毛利軍に従軍した嘯岳・島虎・吉川軍に従軍した宿禰俊岳、鍋島軍に従軍した是琢・明琳、小早川軍に従軍した瑞甫慧瓊杵の禪僧が活躍しているが、彼らはもともと対馬宗氏の外交僧か、博多聖福寺周辺の幻住派ネットワークに属する禪僧であつた。当該期、最先端の朝鮮外交ノウハウは玄界灘地域に集約されていたのであり、朝鮮に出兵した西国大名も彼らを従軍僧として起用したのである〔伊藤幸司 2002b〕。

豊臣政権崩壊後、霸権を握つた徳川家康も西笑承兌を外交文書起草者として用いてゐる。他にも、閑室玄佑（湖心碩鼎の四世孫・幻住派）や以心崇伝（大覚派）らが起草者として確認できるが、注目すべきは家康が新たに儒者の藤原惺齋や林羅山らも起草者として登用したことである。以後、家光の時代まで徳川政権の外交文書起草者は禪僧と儒者が併用され

て活躍する」となるが、一六二二年に以心崇伝が死去すると、以後の外交文書起草は儒者の手に委ねられていくことになつた〔田中健夫 1996・第三章〕。

一方、豊臣政権に引き続き徳川政権からも朝鮮通交の役割をされた対馬宗氏は、朝鮮侵攻後の混亂から日朝国交復活を成し遂げることに成功した。その外交折衝を支えたのは、対馬以町庵の外交僧（景轍玄蘇・規伯玄方の師弟）であった。彼らは、中世以来、対馬で連続と蓄積された日朝外交のノウハウ（偽使派遣能力、外交文書改竄・偽造技術など）を駆使することで〔伊藤幸司 2002c〕、徳川政権初期の日朝外交を支えたのである。しかし、一六三一年に勃発した柳川一件によつて、対馬が密かに行つてきた日朝国書の改竄や偽作の事実が露見したため、徳川政権は日朝通交の正常化を図り、その再発を防止するために、中世以来の系譜を有する対馬独自の外交機関以町庵の外交僧を排除した〔田代和生 1983〕。そして、政権の意思を外交文書や事務折衝に反映させるために、政権が任命した京都五山僧が輪番で以町庵に赴き、朝鮮通交の外交業務に従事するという以町庵輪番制度を新たに確立した〔田中健夫 1996・第五章〕。発足当初の以町庵輪番僧は、外交文書起草技術の面でぎこちなさをみせたが〔伊藤幸司 2006a〕、それまでに蓄積された外交故実を吸収することでその任務を全うし続けた。以後、朝鮮通交の外交業務は、表向きの外交文書を林家、東萊府との折衝や倭館の貿易等の実務を対馬以町庵の輪番僧や対馬藩お抱えの儒者（眞文役・記室）が行うという明確な分掌ができた〔田中健夫

1996・第三章〕。対馬以町庵輪番僧による外交実務遂行は、明治初期に外務省が日朝外交を受取るまで継続された。

このように、禅僧が外交を担うという中世的な外交体制は徳川政権初期まで継続していくが、「四つの口」に代表される近世的な外交秩序が整備され、儒者のみが外交文書を起草するようになると、禅僧が外交に関わる場面も急速に縮小した。そして、最終的には徳川政権から朝鮮通交を司るという家役を任された対馬藩の対馬口（以町庵）においてのみ、禅僧が外交を担うという中世的な様相を残すのである。

注

(1) 長尾美術館旧蔵〔（東巖慧安宛て）兀庵普寧尺牘〕、奈良国立博物館所蔵〔（東巖慧安宛て）兀庵普寧尺牘〕、MOA美術館所蔵〔（本覚上人宛て）兀庵普寧尺牘〕。

(2) 五島美術館所蔵〔（無庵知藏主宛て）西潤子墨尺牘〕。

(3) 寧波の乱を起した第一七次大永度の遣明使の大内船（正使は謙道宗設）には、周防法泉寺住持も乗船していたが、当地で死去したという〔大徳寺文書別集

眞珠庵文書〕（大日本古文書）七の一〇〇五号）。おそらく、寧波の乱時の争乱に巻き込まれたものと推察される。

(4) 『再渡集』と密接に関連する故実史料として、第一次遣明使に対し発給された明側の官文書を収載し

た冊子が現存している「大庭脩1977」。

(5) 江戸期の享保年間頃には、京都五山あるいは対馬以西庵周辺で、中世期の外交僧の素性を調査した「異国使僧小録」が編纂されている〔伊藤幸司2001〕。

(6) 天理大学附属天理図書館所蔵『大館記』(九条家臣藏本)、『エハリア』(第八〇号、一九八三年)に所収〔佐伯弘次1994〕。

【古用文献】・五〇音順

綱野善彦1974「蒙古襲来」小学館

荒木和憲2006「一五・一六世紀の島津氏—琉球関係」『九州史学』第一回四四

荒木和憲2007「中世対馬宗氏領国と朝鮮」山川出版社

有光保茂1937「博多商人宗金とその家系」『史蹟』第一六

伊川健1 2004「天龍寺妙智院所蔵の史料調査報告」(未刊)

章介代表「平成二二年度・平成二十五年度科学的研究費補助金(基盤研究)(A)(1)」研究成果報告書八一一

七世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流—

海域と港市の形成・民族・地域間の相互認識を中心

—」上巻、東京大学大学院人文社会系研究科

伊川健1 2007「大航海時代の東アジア」吉川弘文館

伊藤幸司2001「異国使僧小録」の研究—近世に編纂された中世外交僧関係未刊史料—「禅学研究」第八〇号

伊藤幸司2002a「中世日本の外交と禅宗」吉川弘文館

伊藤幸司2002b「中世後期における対馬宗氏の外交僧」『年報朝鮮学』第八号

伊藤幸司2006c「現存史料からみた日朝外交文書・書契」

『九州史学』第一三三号

伊藤幸司2002d「中世後期外交使節の旅と寺」中尾亮編

『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館

伊藤幸司2003「大内氏の琉球通交」『年報中世史研究』第一八号

伊藤幸司2005「中朝關係における偽使の時代」『日韓歴史共同研究報告書』第二分科篇、日韓歴史共同研究委員会

伊藤幸司2006a「中世日本の港町と禅宗の展開」歴史学研究会編『港町に生きる』青木書店

伊藤幸司2006b「笑雲瑞訴『入唐記』を読む(一)」『市史研究あくおか』創刊号

伊藤幸司2006c「妙智院所蔵「天文十二年後渡唐方進貢物

諸色注文」『市史研究あくおか』創刊号

伊藤幸司2006d「東アジアを流転した対馬藩王宗義成の外文書—右瀬中央研究院所蔵「宗義成書契・別幅」の

紹介—」『東風西声〈九州国立博物館紀要〉』第二号

伊藤幸司2009「日明交流と肖像画賛」『寧波の美術と海域

交流』中国書店

伊藤幸司2010「東アジアをまたぐ禅宗世界」荒野泰典ほか編『日本の対外関係』第四巻、吉川弘文館

今枝愛眞1970「中世禪宗史の研究」東京大学出版会

- 島】山川出版社
 上里隆史 2006 「琉球那霸の港町と「倭人」居留地」 小野正敏ほか編『中世の对外交流一場・ひと・技术』 高志書院
- 上村觀光 1973 「入明使僧妙增都聞に就き」 『五山文学全集』 別巻、思文閣出版
- 上田純一 2000 『九州中世禪宗史の研究』 文献出版
- 上田純一 2006 「足利義満と禪宗—日明国交回復時の禪僧の役割—」 河村貞枝代表『平成一四年度～平成一七年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書 国境をこえる「公共性」の比較史的研究』 京都府立大学文学部
- 榎本 涉 2003 「中世の田本僧と中国語」 『歴史と地理』 第五十六七号
- 榎本 涉 2006 「元僧無夢曇醍と日本」 『禪文化研究所紀要』 第一八号
- 海老根聰郎 1973 「仲猷祖闡・無逸克勤の来朝とその著賛作品」 『美術研究』 第二八七号
- 海老根聰郎 1975 「響波の文人と日本人—十五世紀における」 『東京国立博物館紀要』 第一―号
- 大塚紀弘 2003 「中世「禪律」仏教と「禪教律」十宗觀」 『史等雑誌』 第一二編第九号
- 大庭 僥 1977 「芳洲文庫の「嘉靖公牘集」について」 『関西大学東西学術研究所紀要』 第一〇号
- 岡本 真 2007 「外交文書よりみた十四世紀後期高麗の対日本交渉」 佐藤信ほか編『前近代の日本列島と朝鮮半島』 山川出版社
- 長 節子 2002a 『中世 国境海域の倭と朝鮮』 吉川弘文館
 長 正統 1963 「景敵玄蘇について—外交僧の出自と法系—」 『朝鮮学報』 第二九輯
- 鹿毛敏夫 2008 「戦国大名領国の国際性と海洋性」 『史学研究』 第一六〇号
- 河合正治 1968 「西大寺律宗の伝播」 『金沢文庫研究』 第一四卷第七号
- 川添昭一 1987 「鎌倉中期の对外関係と博多—承天寺の開創と博多綱首謝国明—」 『九州史学』 第八八・八九・九〇号
- 川添昭一 1988 「鎌倉初期の对外関係と博多—箭内健次編『鎌倉日本と国際交流』上巻、吉川弘文館
- 川添昭一 1993 「鎌倉末期の对外関係と博多—新安沈没船 木簡・東福寺・承天寺—」 大隅和雄編『鎌倉時代文化伝播の研究』 吉川弘文館
- 川添昭一 1996 「对外関係の史的展開」 文献出版
- 川添昭一 1999 「日蓮とその時代」 山喜房伝書林
- 川本慎由 2003 「伊藤幸司著『中世日本の外交と禪宗』」 『日本本史研究』 第四九〇号
- 國原美佐子 2003 「垂町時代の書籍入手」 大隅和雄編『文

- 化史の構想』吉川弘文館
 小葉田淳 1941 『中世日支通交貿易史の研究』刀江書院
 小葉田淳 1976 『金銀貿易史の研究』法政大学出版局
 小葉田淳 1993 『増補中世南島通交貿易史の研究』臨川書店
 斎藤夏来 2003 『禅宗官寺制度の研究』吉川弘文館
 佐伯弘次 1994 『室町前期の日流交流と外交文書』『九州史学』第一一一号
 佐伯弘次 1999 『室町期の博多商人宗金と東アジア』『史源』第一三六輯
 佐久間重男 1992 『口明関係史の研究』吉川弘文館
 島尾 新 2008 『イマージュのなかの江南—雪舟が描いた
 金山寺を中心として』『中国—社会と文化』第一二二号
 関 周一 1997 『室町幕府の朝鮮外交』阿部猛編『日本における王権と封建』東京堂出版
 高橋公明 1985 『室町幕府の外交姿勢』『歴史学研究』第五
 四六号
 高良倉吉 1998 『アジアのなかの琉球王国』吉川弘文館
 田代和生 1983 『書き替えられた国書—徳川・朝鮮外交の舞台裏—』中公新書
 田代和生・米谷均 1995 『宗家旧蔵「図書」と木印』『朝鮮学報』第一五六輯
 田中健夫 1959 『中世海外交渉史の研究』東京大学出版会
 田中健夫 1975 『中世对外関係史』東京大学出版会
 田中健夫 1982 『对外関係と文化交流』思文閣出版
 田中博美 1987 『武家外交の成立と五山禅僧の役割』田中健夫編『日本前近代の国家と对外関係』吉川弘文館
 玉村竹一 1966 『五山文学—大陸文化紹介者としての五山禅僧の活動—』至文堂
 玉村竹一 1979 『臨濟宗幻住派』『日本禅宗史論集』下之一、思文閣出版
 玉村竹一 1981 『相国寺開創眷屋妙葩の生活観人生観』『日本禅宗史論集』下之二、思文閣出版
 玉村竹一 1983 『五山禅僧伝記集成』講談社
 知名定寛 2000 『古琉球王国と仏教—尚泰久・尚徳・尚真の仏教政策を中心に—』『南島史学』第五六号
 中村栄孝 1965 『日鮮関係史の研究』上巻、吉川弘文館
 西尾賢隆 1999 『中世の日中交流と禅宗』吉川弘文館
 橋本 雄 1997 『「遣朝鮮国書」と幕府・五山—外交文書の作成と発給—』『日本歴史』第五八九号
 橋本 雄 1998a 『遣明船と遣朝鮮船の経営構造』『遼かなる中世』第一七号
 橋本 雄 1998b 『室町幕府外交の成立と中世王権』『歴史評論』第五八三号
 橋本 雄 1999 『丹波国水上郡佐治莊高源寺所蔵文書』『東京大学日本史学研究室紀要』第三号
 田中健夫 1995 『記述注日本史料 善隣國宝記・新訂続善隣國宝記』集英社
 田中健夫 1996 『前近代の国際交流と外交文書』吉川弘文館

- 橋本 雄 2000a 「安波國水上郡佐治莊高源寺所藏文書
(続)」『東京大學日本史學研究室紀要』第四号
- 橋本 雄 2000b 「室町幕府外交は王權論といかに関わるの
か?」『人民の歴史学』第一四五号
- 橋本 雄 2005 『中世日本の国際関係—東アジア通交圈と
偽使問題—』吉川弘文館
- 橋本 雄 2007 「室町政権と東アジア」『日本史研究』第五
二六九号
- 橋本 雄 2008 「室町日本の対外編」『歴史評論』第六九七
号
- 葉賀麿哉 1993 『中世禪宗成立史の研究』吉川弘文館
- 藤田明良 2008 「東アジア世界のなかの太平記」市沢哲編
『太平記を読む』吉川弘文館
- 牧田諦亮 1955 『策彦入明記の研究』上巻、法藏館
- 牧田諦亮 1959 「策彦入明記の研究」下巻、法藏館
- 三鬼清一郎 1987 「闕白外交体制の特質をめぐって」田中
健夫編『日本前近代の國家と対外関係』吉川弘文館
- 村井章介 1988 『アフアのなかの中世日本』校倉書房
- 村井章介 1995 『東アジア往還—漢詩と外交—』朝日新聞
社
- 村井章介 1997 『国境を超えて—東アジア海域世界の中世
—』校倉書房
- 村井章介 1999 『中世日本の内と外』筑摩書房
- 湯谷 稔 1984 「藤原軒日録が語る遣明貿易・堺南庄」『禪
文化研究所紀要』第一二四号